
鴨川（京都府）

多自然川づくりは
川の「よさ」を見つけるところから

その川らしさをかたちにし、まちと未来につなぐ

国立研究開発法人土木研究所
流域水環境研究グループ 流域生態チーム
上席研究員　鶴田 舞

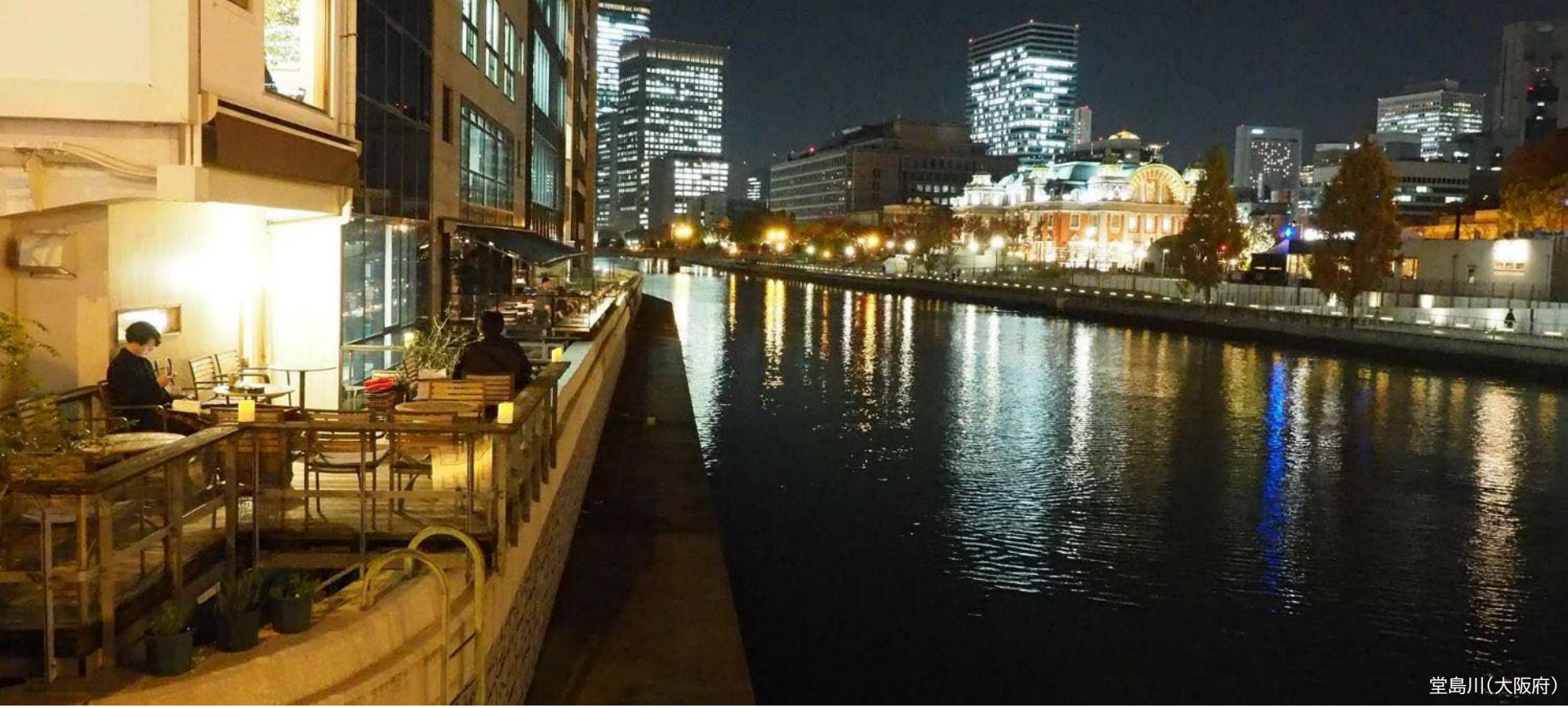
本日お話しすること



01　多自然川づくりが大切にしてきたこと

02　川の「よさ」を見つけ、かたちにする

03　川づくりを、次へつなぐ



堂島川（大阪府）

01

多自然川づくりが大切にしてきたこと

「型」から「すべての川づくりの基本」へ

1990 多自然型川づくりの開始

1996 河川審議会答申
洪水・渇水時に加え、日々の自然や利用にも目を向ける。
流域全体を見て、地域とともに川づくりを考える。

1997 河川法改正
河川環境（自然環境・生活環境）の整備と保全を位置づけ
地域の意見を反映する計画制度

2006 **すべての川づくりの基本に**
多自然川づくり基本指針を策定

2024 基本指針の改定

多自然川づくりの出発点(1990年)

生物の良好な成育環境に配慮し、美しい自然景観を保全あるいは創出する

「多自然型川づくり」の推進について(建設省通達)

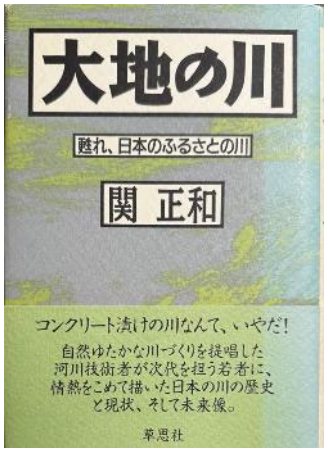
通知で示された留意事項

平面計画　現川の多様な環境を保全する

横断計画　一律の川幅を避け、広くできる場所は広く

護岸工法　水理・背後地を踏まえ、環境・景観に配慮

『大地の川』に記された出発点



「いっさい、技術的な指針もマニュアルも示さずに」

「乱暴といえば、ずいぶん乱暴な通達だった」

「勉強が進んでいなかったので、示せなかっただけ」

事前の調査

専門家の意見を聞き、必要な調査をする

➡

実施・試行錯誤

技術者の創意工夫を川づくりに生かす

➡

実施後の調査

治水上の機能と自然の再生を確かめる

基本指針の定義は、2006年から変わっていない

定義：

「多自然川づくり」とは，**河川全体の自然の営みを視野に**入れ，**地域の暮らしや歴史・文化との調和**にも配慮し，**河川が本来有している生物の生息・生育・繁殖環境**及び**多様な河川景観を保全・創出**するために，河川管理を行うことをいう

侵食・堆積・運搬といった河川全体の自然の営み



地域の暮らしや歴史・文化との調和



適用範囲：

「多自然川づくり」は**全ての川づくりの基本**であり，全ての一級河川，二級河川及び準用河川における**調査，計画，設計，施工，維持管理・更新，災害復旧等の河川管理における全ての段階・過程を対象**とする.

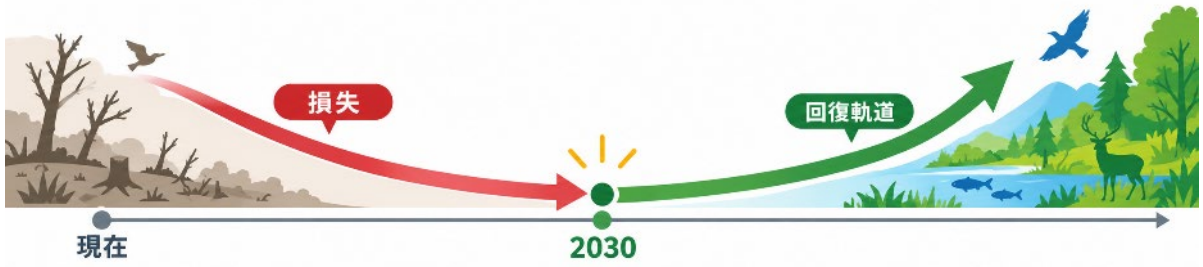
基本指針とネイチャーポジティブ

なぜ、自然の回復が必要か

食料・水・災害の緩和など、暮らしを支える自然の恵み。
その基盤となる生物多様性が、失われ続けている。

ネイチャーポジティブ（自然再興）

2030年までに、損失を止め、生物多様性を回復軌道へ



多自然川づくりが貢献できること

生物の生息・生育・繁殖環境を、保全・創出する。

実施しただけで、回復を達成したとは言えない。
効果をモニタリング・評価で確かめる。

近畿の事例から見る、大切にしてきたこと



一乗谷川（福井）

歴史的価値を活かすため、
協議を重ね、
設計を見直す

土木学会デザイン賞
2015年最優秀賞



木津川（大阪）

分断された水辺を、
地域が使い、
関われる場所へ

土木学会デザイン賞
2018・2019年 奨励賞



桂川・嵐山（京都）

大切な風景を守り、
治水対策の
構造・意匠を工夫

土木学会デザイン賞
2023年 優秀賞

自然の営み、生き物のすみか。
多様な河川景観と、地域の暮らし・歴史・文化。



一乗谷川（福井県）／写真：脇本幹雄氏

02

川の「よさ」を見つけ、かたちにする

川全体の目標と、その場所の「よさ」

水系・全川／流程区間

目指す川の姿・整備目標

河川整備基本方針・河川整備計画に位置づける

地区の特性・地域の個性に応じて具体化

対象地区

この場所の何を保全し、どう向上させるか

現地の「よさ」を捉え、地区の目標像・整備方針を考える

目標像・方針を、具体の設計へ

地域とのやり取りを、川づくりの目標へ（由良川）

2000.3 **流域委員会を設置**
流域の川づくりを審議

2000.8～ **住民意識調査を開始**
川との関わり、環境、治水などの意見を聞く

2001.12 **5会場で原案説明会**
大江・宮津・舞鶴・福知山・綾部で意見交換

2003.8 **河川整備計画を決定**
地域と目指す川の姿を、計画に位置づける

計画に掲げた川の姿

悠 文化を運び、文化が交わる

雄 安全で豊かな暮らしを支える

優 多様な自然と仲良くなれる

地域の声を聞きながら、目指す川の姿を考えてきた

出典：由良川水系流域委員会「住民意識調査について」・原案説明会資料／河川整備計画（2003）

その場所の「よさ」をどう見つけるか

既存の資料を読む

河川整備計画、モニタリング結果、
過去の地図や写真など

自分たちで見に行く・調査する

川の中、水際、河岸、まちとの関係を
現地で確かめる

地域住民や学識者等に尋ねる

日常の使い方、昔の姿、
専門的な知見を聞く。
立場によって異なる「よさ」にも気づく。



地域の川の印象や魅力、
水辺でどんなことがしたいか
地域の皆さんとワークショップ

現地で見るポイント：川から、まちまで

まちと川をひと続きに見て、現地で確かめる

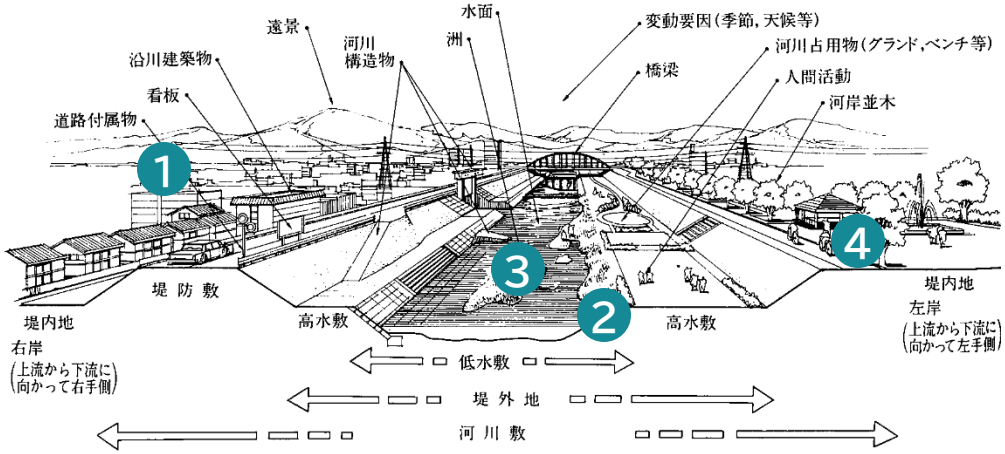


図-1.1　河川景観の構成要素

1. まちから川が見えるか、行きやすいか
2. 水際へ近づけるか、安全か
3. 流れ・地形・植生にどんな特徴があるか
4. どこが居心地よく、どう使われ、手入れされているか

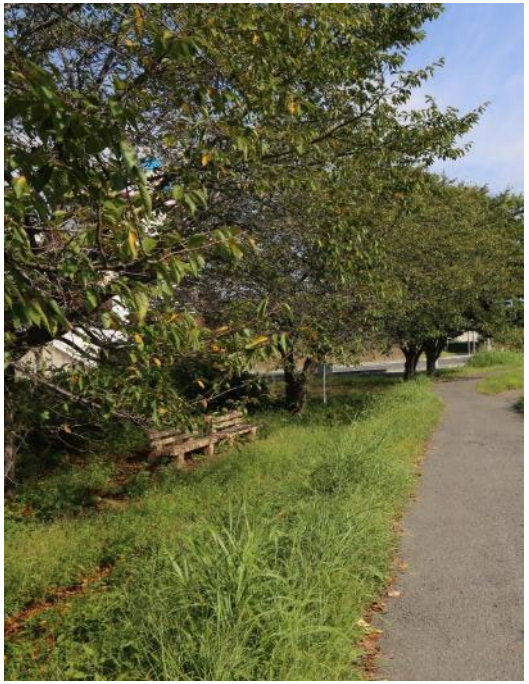
図の出典：「水辺の景観設計」（土木学会編，1988）

どのベンチに座りたいですか？

A



B



C



まず座ってみる。

水面の見え方や、居心地を確かめる。

実際に座ると、何が見えるか？

A



B



C



写真での想像と、座ったときの見え方は異なる

水面の見え方、日陰、周囲との関係も確かめる。

一乗谷川―歴史的価値を活かす川づくり

洪水に備えながら、史跡にふさわしい川へ



一乗谷川と朝倉氏史跡公園

改修の必要性と、守るべき歴史

氾濫被害への対策
国特別史跡・一乗谷朝倉氏遺跡

地域の声を受け止める

文化財担当者・専門家と
史跡にふさわしい
整備方針を考えた

河川と文化財の双方から、何を大切にするかを考える

一乗谷川：遺構と新しい石積みを、なじませる

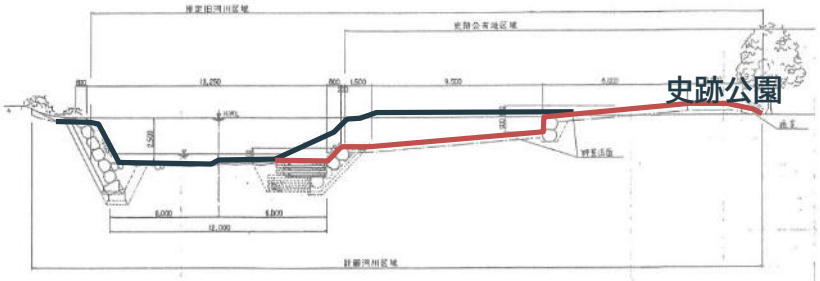
出土した石垣を活かし、新しい石積みにつなぐ

出土した石垣と、史跡公園に合わせる



一乗谷川と背後の史跡公園

黒：標準断面　　赤：整備後



出土した石垣に合わせ、
護岸の位置・勾配を調整

史跡公園につながる河岸

文化財の専門家と河川管理者が協議を重ね、設計・施工に反映

木津川―分断された水辺を、地域の場所に

水運・商業の歴史がある場所で、川とまちをつなぎ直す

整備前：カミソリ堤防



整備後：使い、関わる水辺



地域との対話



土木部門と文化部門が連携

整備の要否から話し合い、使い方を設計条件に。
ワークショップとコンペで、具体の形へ。

地域が使い、愛着を持ち、手を入れられる場所へ

写真：大阪府西大阪治水事務所資料

木津川―分断された水辺を、地域の場所に

水運・商業の歴史がある場所で、川とまちをつなぎ直す

平面図：川・堤防・まちの位置関係



まち側に確保した空間を、まちと水辺をつなぐ地域の場所へ



木津川・東側入口（2018.1.30）

まちから水辺までの高低差

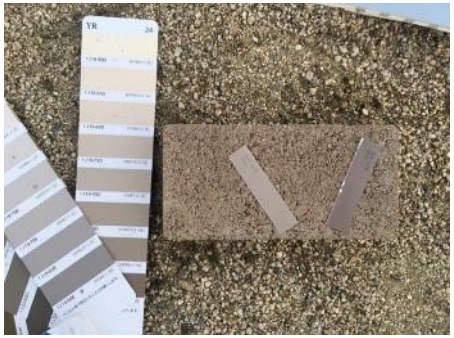


平面図：大阪府西大阪治水事務所資料（図面提供：岩瀬諒子設計事務所）
高低差図：大阪府提供資料

木津川―地域とともに、細部までつくり込んだ



実寸模型で空間を体験



色・素材感を現地で確認



手入れの道具を置く設備



地域で植栽を手入れ

設計者が施工段階まで関わる

府担当者・設計者が実物で確かめ、調整を重ねた

使い方と手入れを具体化

舗装・道具の置き場を検討
地域の会が緑化・清掃

使い方と、手入れする担い手を合わせて考えた

写真：大阪府西大阪治水事務所資料

桂川・嵐山：風景を守るための構造・意匠



守る対象

川・渡月橋・山が一体となった風景と、
それを眺める場所

構造の選択

道路を嵩上げせず、
特殊堤と可動式止水壁を組み合わせる

意匠の工夫

石積み・舗装・壁の納まりを周囲に
調和させ、水際の植生も残す

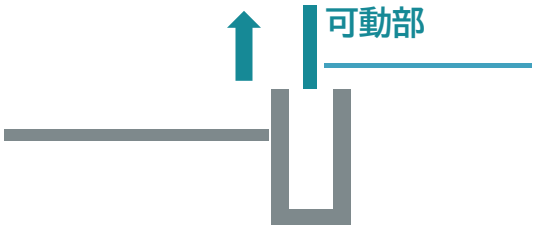
特殊堤から渡月橋を望む（整備後）



平常時：内部に収納し、眺望を保つ



洪水時：油圧で可動部を上昇



普段から、管理する川の「よさ」を知っておく

大事なことは、整備計画に書いておく

地域と考えた目標を、設計・管理のよりどころにする

普段から、管理する川の
いいところを知っておく

川を見る。地域の声を聴く。発見を記録する。

川の「よさ」に気づくことが、もっとよくしたいと思う第一歩になる。



夙川(兵庫県)

03

川づくりを、次へつなぐ

多くの現場が、調査・評価・人材を課題としている

川ごと・場所ごとに考える必要がある。正解は一つではない。
手間も時間もかかる。そのうえ、現場にはこんな課題もある。



モニタリング調査の負担を減らしたい。
調査結果を読み解き、次の管理判断につなげたい。

出典：地方整備局への課題・ニーズ調査（2026年7～9月、流域生態チーム）

土研が目指す、モニタリングから管理判断へ

モニタリングの効率化・高度化

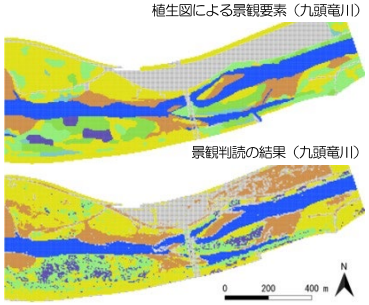
調査・データ整理の負担を減らし、川の変化を継続的に把握する。
新たな技術を使う研究・試行を進める。

環境DNA

採水から魚類相を把握

衛星画像×AI

画像から植生を判読



人流データ

水辺訪問者の属性・時間・ルート



管理判断につなげる評価方法・基準づくり

保全・改善や設計・施工・維持管理の判断に活かすため、評価方法・基準を研究中。

モニタリングと評価の実践例：岩木川

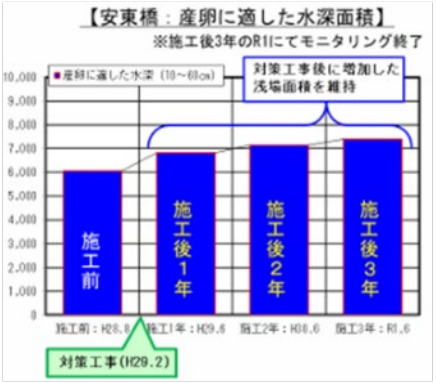
整備前
2013年撮影

整備直後
2017年5月

施工9年目
2025年6月



調査・分析 ↓ 産卵床が6か所から3か所へ
原因 ↓ 川の二極化・河床の粗粒化
対策 ↓ 砂州を掘削し、河床へ戻して浅場再生
効果確認 ↓ 産卵を継続確認・浅場面積は3年間維持
評価・課題 環境改善を評価。その後の固定化を把握



次の管理判断・定期的な維持管理へ

（令和7年度全国多自然川づくり会議資料より）

岐阜県：川に入り、試し、振り返る学びの場

全国会議で知った宮崎県の取組を訪ね、岐阜で実践

現場で考える



目標や石の置き方を
現地で話し合う

一緒に試す



職種・世代を越えて
川に入り、手を動かす

振り返り、共有する



工夫・気づきを発表し、
専門家がレビューする

河川環境の改善を、技術者が育つ機会にする

（令和7年度全国多自然川づくり会議資料より）

寝屋川：住民と行政の協働による魚道づくり

住民と行政が協働し、魚が行き来できる川と人が親しめる水辺を実現する

川勝水辺ひろばの魚道（2019年整備）



魚道整備前



魚道整備後





川勝水辺ひろば：河川敷と水際

地域の意見を整備へ

自治会・ねや川水辺クラブ・学校・行政で計画を検討。
住民との協働で魚道と渡り橋を整備した。

継続的な関わりの例：芥川

芥川倶楽部などが、計画から魚道の補修・維持管理まで関わる。

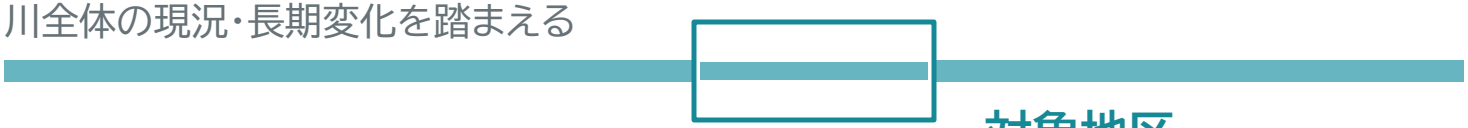
整備内容：大阪府「私の水辺」令和元年度資料

川全体の目標から、地区の実践、そして次の管理へ

水系・全川／流程区間

目指す川の姿・整備目標を、計画に位置づける

川全体の現況・長期変化を踏まえる



対象地区

地区の特性に応じて具体化

対象地区の目標像・整備方針

設計・施工で具体化 → 変化を確かめる

↑ ↓

次の管理判断へ ← 評価する

経験や技術を記録・共有し、次の実践へ



多自然川づくりは、
難しい。でも面白い。

川の「よさ」を見つけ、仲間と考え、
少しずつよくしていく。

その経験を持ち寄り、次の川づくりへ。

近畿の多自然川づくり会議の
30年以上の積み重ねを、これからも。
経験を共有し、互いに学び、刺激を受け合う場へ。

夙川（兵庫）